

[D年] 聖霊降臨節第21主日(2020年10月18日)**【旧約聖書日課】エレミヤ書 29章1節、4～14節**

1以下に記すのは、ネブカドネツァルがエルサレムからバビロンへ捕囚として連れて行った長老、祭司、預言者たち、および民のすべてに、預言者エレミヤがエルサレムから書き送った手紙の文面である。

4「イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。わたしは、エルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に告げる。5家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。6妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない。7わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。

8イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたたちのところにいる預言者や占い師たちにだまされてはならない。彼らの見た夢に従ってはならない。9彼らは、わたしの名を使って偽りの預言をしているからである。わたしは、彼らを遣わしてはいない、と主は言われる。

10主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。11わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であつて、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。12そのとき、あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに祈り求めるなら、わたしは聞く。13わたしを尋ね求めるならば見だし、心を尽くしてわたしを求めると、14わたしに出会うであろう、と主は言われる。わたしは捕囚の民を帰らせる。わたしはあなたたちをあらゆる国々の間に、またあらゆる地域に追いやつたが、そこから呼び集め、かつてそこから捕囚として追いついた元の場所へ連れ戻す、と主は言われる。

【使徒書日課】フィリピの信徒への手紙 3章7～21節

7しかし、わたしにとって有利であつたこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8そればかりか、わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失とみています。キリストのゆえに、わたしはすべてを失いましたが、それらを塵あくと見なしています。キリストを得、9キリストの内にいる者と認められるためです。わたしには、律法から生じる自分の義ではなく、キリストへの信仰による義、信仰に基づいて神から与えられる義があります。10わたしは、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかつて、その死の姿にあやかりながら、11何とかして死者の中からの復活に達したいのです。

12わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。13兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向け

つつ、14神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら歩くことです。15だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことをも明らかにしてください。16いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。

17兄弟たち、皆一緒にわたしに倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、わたしたちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。18何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。19彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥すべきものを誇りとし、この世のことしか考えていません。20しかし、わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。21キリストは、万物を支配下に置くことのできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。

【福音書日課】ヨハネによる福音書 17章13～26節

13しかし、今、わたしはみもとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らの内に満ちあふれるようになるためです。14わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです。15わたしがお願ひするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。16わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないのです。17真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの御言葉は真理です。18わたしを世にお遣わしになったように、わたしも彼らを世に遣わしました。19彼らのために、わたしは自分自身をささげます。彼らも、真理によってささげられた者となるためです。

20また、彼らのためだけでなく、彼らの言葉によってわたしを信じる人々のためにも、お願ひします。21父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたがわたしをお遣わしになったことを、信じるようになります。22あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23わたしが彼らの内におり、あなたがわたしの内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたがわたしをお遣わしになったこと、また、わたしを愛しておられたように、彼らをも愛しておられたことを、世が知るようになります。24父よ、わたしに与えてくださった人々を、わたしのいる所に、共におらせてください。それは、天地創造の前からわたしを愛して、与えてくださったわたしの栄光を、彼らに見せるためです。25正しい父よ、世はあなたを知りませんが、わたしはあなたを知っており、この人々はあなたがわたしを遣わされたことを知っています。26わたしは御名を彼らに知らせました。また、これからも知らせます。わたしに対するあなたの愛が彼らの内にあり、わたしも彼らの内にいるようになるためです。

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

エレミヤ書 29章1節、4～14節

1次に記すのは、ネブカドネツァルがエルサレムからバビロンへ捕囚として移した、生き残っている長老たち、祭司たち、預言者たち、およびすべての民に、預言者エレミヤがエルサレムから書き送った手紙の言葉である。

4「イスラエルの神、万軍の主は、私がエルサレムからバビロンへ捕囚として送ったすべての者に、こう言われる。5家を建てて住み、果樹園を造って、その実を食べなさい。6妻をめとって息子、娘をもうけ、息子には妻を迎え、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そこで増えよ。減ってはならない。7私が、あなたがたを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたがたにも平安があるのだから。

8イスラエルの神、万軍の主はこう言われる。あなたがたのうちにいる預言者や古い師たちにだまされてはならない。あなたがたのために夢を見る〔直訳→あなたがたが夢を見させている〕夢占い師に耳を傾けてはならない。9彼らは、私の名を使ってあなたがたに偽りの預言をしているからである。私は彼らを遣わしてはいない——主の仰せ。

10主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたらすぐに、私はあなたがたを顧みる。あなたがたをこの場所に帰らせるという私の恵みの約束を果たす。11あなたがたのために立てた計画は、私がよく知っている——主の仰せ。それはあなたがたに将来と希望を与える平和の計画であつて、災いの計画ではない。12あなたがたが私を呼び、来て私に祈るならば、私は聞く。13私を捜し求めるならば見いだし、心を尽くして私を求めらば、14私は見いだされる——主の仰せ。私あなたがたの繁栄を回復する〔別訳→捕らわれ人を帰らせる〕。あなたがたをあらゆる国々に、またあらゆる場所に追いやつたが、そこからあなたがたを集める——主の仰せ。

フィリピの信徒への手紙 3章7～21節

7しかし、私にとって利益であつたこれらのことを、キリストのゆえに損失と見なすようになったのです。8そればかりか、私の主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切を損失と見ています。キリストのゆえに私はすべてを失いましたが、それらは今ほ肩と考へています。キリストを得、9キリストの内にいる者と認められるためです。私には、律法による自分の義ではなく、キリストの真実〔別訳→キリストへの信仰〕による義、その真実〔別訳→信仰〕に基づいて神から与えられる義があります。

10私は、キリストとその復活の力を知り、その苦しみにあずかって、その死の姿にあやかりながら、11何とかして死者の中からの復活に達したいのです。12私は、すでにそれを得たというわけではなく、すでに完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスによって捕らえられているからです。13きょうだいたち、私自身はすでに捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向け

つつ、14キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。15だから、完全な者は誰でも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたが何か別の考え方をしているなら、神はそのことも明らかにしてくださいませ。16いずれにせよ、私たちは到達したところに基づいて進みませう。

17きょうだいたち、皆一緒に私に倣う者となりなさい。また、あなたがたと同じように、私たちを模範として歩んでいる人々に目を向けなさい。18何度も言ってきたし、今また涙ながらに言いますが、キリストの十字架の敵として歩んでいる者が多いのです。19彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹〔別訳→下腹部〕を神とし、恥ずべきものを誇りとし、地上のことしか考えていません。20しかし、私たちの国籍〔直訳→市民権〕は天にあります。そこから、救い主である主イエス・キリストが来られるのを、私たちは待ち望んでいます。21キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、私たちの卑しい体を、ご自身の栄光の体と同じ形に変えてくださるのです。

ヨハネによる福音書 17章13～26節

13しかし今、私は御もとに参ります。世にいる間に、これらのことを語るの、私の喜びが彼らの内に満ち溢れるようになるためです。14私は彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。私が世から出た者でないように、彼らも世から出た者ではないからです。15私がお願ひするのは、彼らを世から取り去ることではなく、悪い者から守ってくださることです。16私が世から出た者でないように、彼らも世から出た者ではありません。17真理によって、彼らを聖なる者としてください。あなたの言葉は真理です。18私を世にお遣わしになったように、私も彼らを世に遣わしました。19彼らのために、私は自らを聖なる者とします。彼らも、真理によって聖なる者とされるためです。

20また、彼らについてだけでなく、彼らの言葉によって私を信じる人々についても、お願ひします。21父よ、あなたが私の内におられ、私がある内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らも私たちの内にいるようにしてください。そうすれば、世は、あなたが私をお遣わしになったことを信じるようになります。22あなたがくださった栄光を、私は彼らに与えました。私たちが一つであるように、彼らも一つになるためです。23私が彼らの内におり、あなたが私の内におられるのは、彼らが完全に一つになるためです。こうして、あなたが私をお遣わしになったこと、また、私を愛されたように、彼らをも愛されたことを、世が知るようになります。24父よ、私に与えてくださった人々を、私のいる所に、共にいるようにしてください。天地創造の前から私を愛して、与えてくださった私の栄光を、彼らに見させてください。25正しい父よ、世はあなたを知りませんが、私はあなたを知っており、この人々はあなたが私をお遣わしになったことを知っています。26私は彼らに御名を知らせました。また、これからも知らせます。私を愛してくださったあなたの愛が彼らの内にあり、私も彼らの内にいるようになるためです。」

黙想のためのノート**次主日聖書日課について**

・10月18日「聖霊降臨節第21主日」の日課主題は「天国に市民権をもつ者」。教団主日聖書日課表の一年一巡りの終わりの主日は、主題「天国に市民権をもつ者」と共に各年で決まった聖書日課が定められている。伝統的な教会暦の一年一巡りの終わりは、「待降節」に入る前の主日で、「終末主日」などと呼ばれてきたが、教団主日聖書日課表の一年一巡りの終わりの主日は、この「終末主日」に相当するものとして位置づけられ、聖書日課が定められている。すなわち、「終末」の使信を告げる聖書箇所から定められている。

・「終末」の使信は、教会史上早い段階から、個人的な救いの完成に関する関心の中で取り扱われることが主流となってきた。すなわち、個々の人が究極的に救われるかどうかは終末の「最後の審判」において確定する、とするような扱いである。確かに、主イエスの教えの中でも、使徒らの教えの中でも、このような関心で「終末」が扱われる場合があるが、実は、このような関心は、主イエス独自のものでも、キリスト教会固有のものでもない。それは、紀元1世紀のユダヤ教の主流ラビたちの間で教えられていた「終末」観であり、ユダヤ教・キリスト教に共通する「終末」的関心にすぎない。「終末」に関してキリスト教がユダヤ教と論を異にするのは、「終末」において完成するという事柄が主イエス・キリストにおいてすでに始まっている、と考える点においてである。それは、主イエスが洗礼者ヨハネから継承する形で主唱したとされる「神の国は近づいた」という使信にもすでに表れている「終末」理解で、弟子たちの初代教会は、主イエスの「死と復活」の出来事においてそれが確実に始まっていることを確信した、と新約各書は告げているのである。

・このような「終末」理解は、「現在の終末論」などと呼ばれ、この視点こそが、キリスト者やキリスト教会の現在における行動指針の出発点になっている。一方、ユダヤ教で、「現在の終末論」を積極的に取ることをしなかったのは、実のところ「ユダヤ人であるための律法」という明確な行動指針を保持し続けたからだと考えられることができる。しかし、このようなユダヤ教の行動指針では、ユダヤ人ではない異邦人が参与するには乗り越えなければいけない大きな障壁があることになる。主イエスや初代教会が見出したのは、そのようなユダヤ教の有する行動指針を取らずに、なお「聖書(旧約聖書)」に基づいて、「終末」の救いにあずかる「神の民」としての現在の行動指針を得る道であった。

旧約日課(エレミヤ 29 章より)

・「エレミヤ書」については、「200909」の資料を参照。預言者エレミヤは、南王国末期のヨシヤ王の時代(在位=前 639~609 年頃)におこなわれた政治改革に関わり、ヨシヤ王戦死後の大国(エジプト、バビロニア)に翻弄される南王国にあって、ヨシヤ王の始めた改

革の方向性(「申命記」的改革!)に沿って為政者らの政治姿勢を糺す預言活動を行ったが、バビロニアによって始められていた「捕囚」を神の計画にあることとして受け入れるように告げたために、体制派から迫害を受けた。エルサレム陥落(前 589 年頃)に伴う混乱の中で、エジプトに連行されたと推測される。日課箇所は、陥落前のエルサレムから、すでに捕囚されてバビロンに留め置かれている同胞らに向けて記された「書簡」として伝えられている。2~3 節に伝えられる経緯を見ると、エレミヤが南王国内で非主流派であったとしてもなお体制内に自分の地位を維持していたことが推察される。なお、3 節にある「ヒルキヤ」は、ヨシヤ王時代の太師の名であると共に(王下 22:4)、エレミヤの父の名でもあり(エレ 1:1)、エレミヤとの関係を推認させるが、詳細は不明。仮にエレミヤが太師ヒルキヤの子であったならば、南王国の体制中枢に地位のある者でありながら反主流の立場に追いやられて権力闘争に巻き込まれていたということであり、その地位から公的なルートを通して捕囚の民に書簡を送ったり、その書簡が保管され後代に受け継がれたということも、特段不思議なことではないと言えるだろう。

・日課箇所の書簡で、エレミヤは、捕囚の地に置かれた人々が、そこで生活を確立し、地に足をつけて、捕囚から解放される「時が満ちる」のを待つようにと勧めている。エレミヤの見通す「時」の視座は、バビロン捕囚が終わるまでの「七十年」という近い将来のことであり、その「時」に実現することも、ユダの地への帰還という地上的な希望に過ぎない。しかしながら、この「約束の地を離れて、時が満ちるのを待つ」者のあり方は、「イスラエル古典史」とも言える「族長物語」および「モーセ物語」の信仰者の姿と重ね合わされたものでもあり、それゆえに、「希望」を「終末」的なものへとシフトしていく時代において、なお普遍性を持つ使信として受けとめられたのであろう。

・捕囚の期間として言われる「七十年」は、前 609 年の「ヨシヤ王の戦死」から前 539 年の「ペルシャによるバビロニア陥落と捕囚解放」までを指していると考えるのが自然である。

使徒書日課(フィリピ 3 章より)

・「フィリピの信徒への手紙」は、使徒パウロの「獄中書簡」の一つとして数えられる。フィリピの教会は、パウロの第二回宣教旅行(使徒 16 章~)で初めて訪れたマケドニアの最初の伝道地で創設された教会で、当地はユダヤ人住民が少なく「会堂」もない状況であったにもかかわらず、ユダヤ人女性商人のリディアらが有力な協力者かつ支援者となり、その後のパウロの伝道活動を物心両面で支え続けた。本書簡について、歴史批評主義の聖書学者の中には複数の書簡の合成であると見る者もあるが、そのような見方を取る必然性は必ずしもない。

・日課箇所の前半でパウロは、直前に自己の「ユダヤ人としての経歴」を述べ、そこに「ユダヤ人」としての不足も落ち度もないと示したことを受けて、それらを一概放棄するに値する大きな価値をキリストによって与えられたのが今の自分であると告白している。その中で、キリストによって与えられたことを「死者の中からの復活」という表現で示した後に、パウロは、「復活」という言葉で表現される到達点を「完全な者」と言い換え、そこに到達するまでの過程の中に今の自分たちが置かれているという自己理解を示す。パウロは、ユダヤ教徒として最初から有していた「終末」観を、キリストによって現在化されることによって、単にあらかじめ範囲の定まった試験に合格し続ければよいという「静的」な信仰者像ではなく、日々漸進的に「完全」を目指して歩みを新たにするという「動的」な信仰者像を示している。

福音書日課(ヨハネ 17 章より)

・日課箇所は、ヨハネ福音書の伝える「イエスの大祭司の祈り」と呼ばれる箇所の一部。これまでの叙述の中で主イエスが繰り返し示してこられた、父と子の一体、さらに子と結びつく弟子らを含めた一体、ということを確認するものとしていただけるようにと祈り、加えて、弟子らを通して子と結びつく新たな弟子たちをも含めた一体の実現を主イエスが願われていたことを示す。それは、弟子たちの教会の宣教論の基礎となるものである。

来週の誕生日 (10月18日～24日)

主日礼拝の讃美歌から

- ・II-4 番「この世にあかしをたて」(=21-379 番「この世にあかし立てて」)は、19 世紀を代表する讃美歌作家で英国教会主教の W.W.ハウ。作曲はヴォーン・ウィリアムズ。英語圏では聖徒の日にもっともよく歌われる讃美歌の一つ。
- ・21-385 番「花彩る春を」は、『讃美歌 21』編纂に当たって公募採用された日本人作詞作曲の讃美歌。作詞の上島美枝は、松山教会のオルガニストで、当初父親が作曲した曲との組み合わせで応募した。曲は、県町教会で受洗して後に日本キリスト教会に移った合唱指導者・作曲家の高浪晋一が、この歌詞に合わせて作曲。
- ・II-136 番「われ聞けり、かなたには」は、20 世紀スウェーデンのバプテスト派讃美歌作家リディア・リテルの作詞編曲。英語圏の福音派で歌われるようになり、日本でもリバイバル集会で紹介され歌われてきた。

II-4「この世にあかしをたて」

For All the Saints, who from their Labours Rest

1. For all the saints, who from their labors rest, / who thee by faith before the world confessed, / thy Name, O Jesus, be forever blessed. / Alleluia, Alleluia!

2. Thou wast their rock, their fortress and their might; / thou, Lord, their Captain in the well-fought fight; / thou, in the darkness drear, the one true Light. / Alleluia, Alleluia!
 3. For the apostles' glorious company, / who bearing forth the cross o'er land and sea, / shook all the mighty world, we sing to Thee: / Alleluia, Alleluia!
 4. O blest communion, fellowship divine! / We feebly struggle, they in glory shine / yet all are one in thee, for all are thine. / Alleluia, Alleluia!
 5. And when the strife is fierce, the warfare long, / steals on the ear the distant triumph song, / and hearts are brave, again, and arms are strong. / Alleluia, Alleluia!
 6. The golden evening brightens in the west; / soon, soon to faithful warriors cometh rest; / sweet is the calm of paradise the blest. / Alleluia, Alleluia!
 7. But lo! there breaks a yet more glorious day; / the saints triumphant rise in bright array; / the King of glory passes on his way. / Alleluia, Alleluia!
 8. From earth's wide bounds, from ocean's farthest coast, / through gates of pearl streams in the countless host, / singing to Father, Son, and Holy Ghost: / Alleluia, Alleluia!
- (Hymnal 1982: according to the use of the Episcopal Church #287)

II-136「われ聞けり、かなたには」

Jag har hört om en stad

1. Jag har hört om en stad ovan molnen / Ovan jordiska dimhöljda länder / Jag har hört om dess solljusa stränder / Och en gång, tänk en gång är jag där / Halleluja, jag högt måste sjunga / Halleluja, jag går till den staden / Om än stegen blir trötta och tunga / Bär det uppåt och hemåt ändå
2. Jag har hört om ett land utan tårar / Utan sorg, utan nöd, utan strid / Och där ingen sjukdom mer lider / Och en gång, tänk en gång är jag där / Halleluja, där fröjdas vi alla / Halleluja, vart tvivel försvunnit / Aldrig mer ska jag stappla och falla / Jag är framme, ja hemma hos Gud
3. Jag har hört om den snövita dräkten / Och om glansen av gyllene kronor / Jag har hört om den himmelska släkten / Och en gång, tänk en gång, är jag där / Halleluja, jag fröjdas i anden / Jag kan höra den himmelska sången / Och det sliter i jordiska banden / Ty jag vet jag ska snart vara där

English translation

I have heard about a town

1. I have heard about a town above the clouds / Above earthly fog-shrouded countries / I have heard about its sunny shores / And someday, yes someday I will be there / Hallelujah, I must sing high / Hallelujah, I am walking towards that town / And if my footsteps get tired and heavy / I am still going upwards and homewards
2. I have heard about a country without tears / Without sorrow, without distress, without battles / And where nobody suffers from diseases / And someday, yes someday I will be there / Hallelujah, let us all rejoice / Hallelujah, all doubt is gone / I will never stumble and fall again / I am there, yes at God's home
3. I have heard about the snow white dress / And the shine of golden crowns / I have heard about the heavenly family / And someday, yes someday I will be there / Hallelujah, I rejoice in the spirit / I can hear the heavenly song / And it is tearing the earthly bonds / For I know I will soon be there